

## 15) バジル＝目箒

バジルはシソ科の一年草で、原産地はインドからインドシナ半島である。草丈は約 50cm、葉は対生し卵形で長さ 5~10cm、夏期、白色の小さな唇形の花を穂状につける。学名は『*Ocimum basilicum*』で、和名はメボウキである。メボウキとは聞き慣れない言葉だが、漢字では『目箒』と記し、その意味は目を掃除するホウキというほどのもので、小粒の黒い種子を水に浸けておくと、種子の表面が寒天状になり、漢方ではこれで目を洗ったことに由来する。

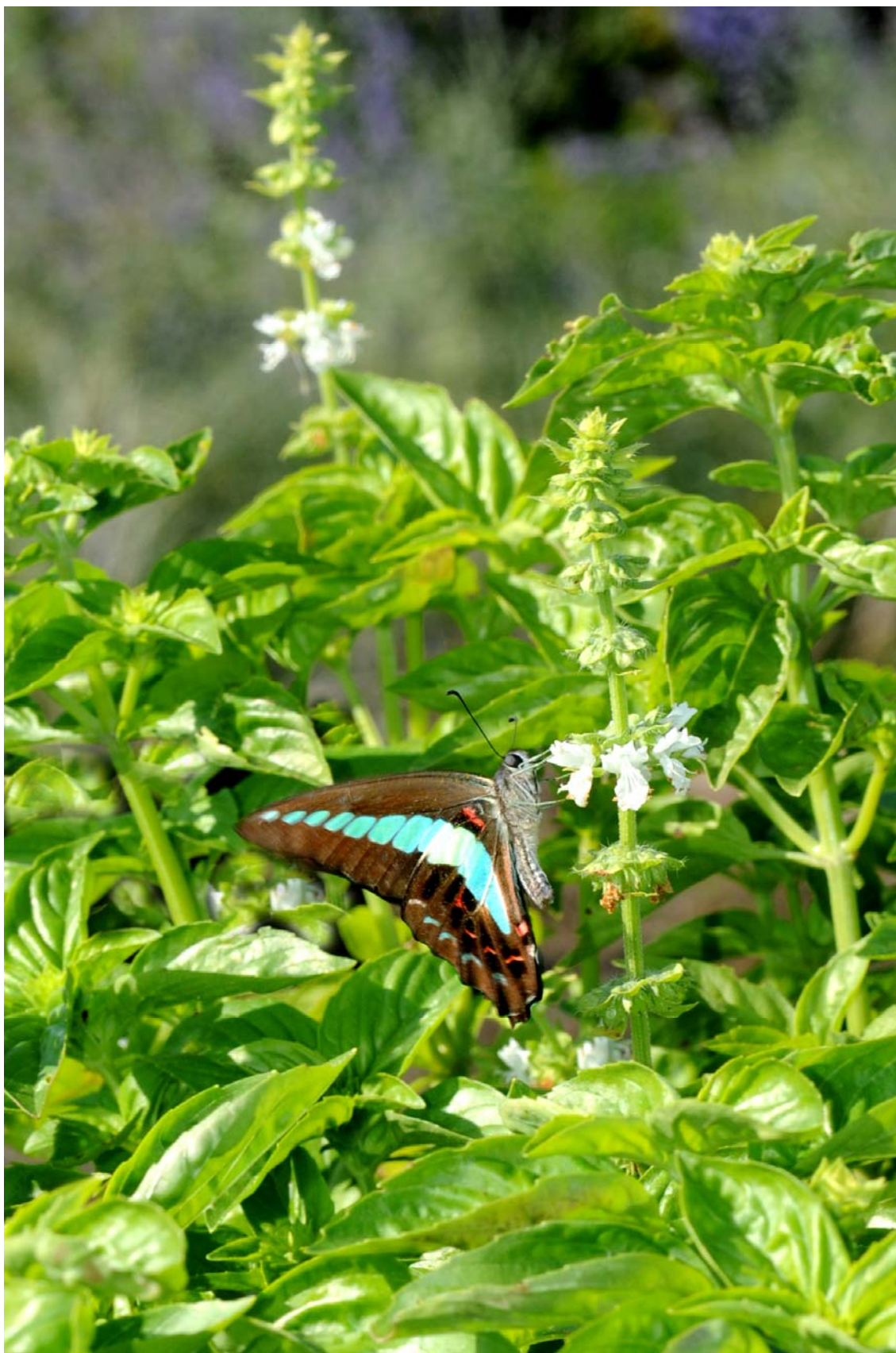
バジルがヨーロッパに伝わったのは、16 世紀になってからのことで、現在では南ヨーロッパのスペインやイタリア、フランスの地中海岸などでも栽培されている。日本には江戸時代に渡来したが、近縁種であるシソがすでに一般に普及していたためか、栽培されることはなかった。原産地インドでは神聖な植物とされており、『ヴィシュヌ神』の妻である『ラクシュミ』は、バジルがその姿を変えたものと考えられ、この植物の小枝を折ったりすると、バジルを冒瀆する不埒な行為とされ、許されなかった。しかしヒンズー教徒は、誰でも死ぬときは胸の上にバジルの葉を置くことになっていたから、その葉を一枚摘むことやバジルの実をとって数珠にして身に付けることは許されていた。またバジルの葉を天国の入り口で見せると、入ることを許されたという。ペルシャやマレーシアでは、バジルは墓地に植えられ、エジプトでは死者の永眠する場所に撒かれた。ところがギリシャでは貧乏神として神格化されており、そのイメージは各地で異なっている。ヨーロッパ特にルーマニアでは、若い女性が若い男性と結婚しようと思うとき、その男性にバジルの小枝を直接渡すことができれば、願いが叶うと考えられていた。一方クレタでは涙で洗い清められた純愛を象徴しており、『目箒』との関連性が見られる。いずれにしてもバジルは男女間の愛の象徴であり、特に女性から男性への愛を語ることに特徴があったようだ。またザクセン地方ではバジルは純潔を試す植物と考えられ、身持ちの悪い者がさわると、萎れてしまうと信じられていた。

もう一つバジルで忘れることができない物語は、かのイザベラの話であろう。この話はボッカチオの物語に、またキーツの詩に、さらにはハントの絵にも描かれているので、ご存じの方も多いただろう。イザベラの恋人であった美男子のロレンツォをイザベラの兄弟が殺してしまう。そのことをイザベラは夢の中に出てきたロレンツォから聞いて知り、ロレンツォが埋められていたところに行き、死体を掘り出し、首だけを植木鉢に入れて、その上にバジルを植えた。そしてこのバジルを昔の恋人として大事に育てたというのである。身の毛もよだつ物語ではある。

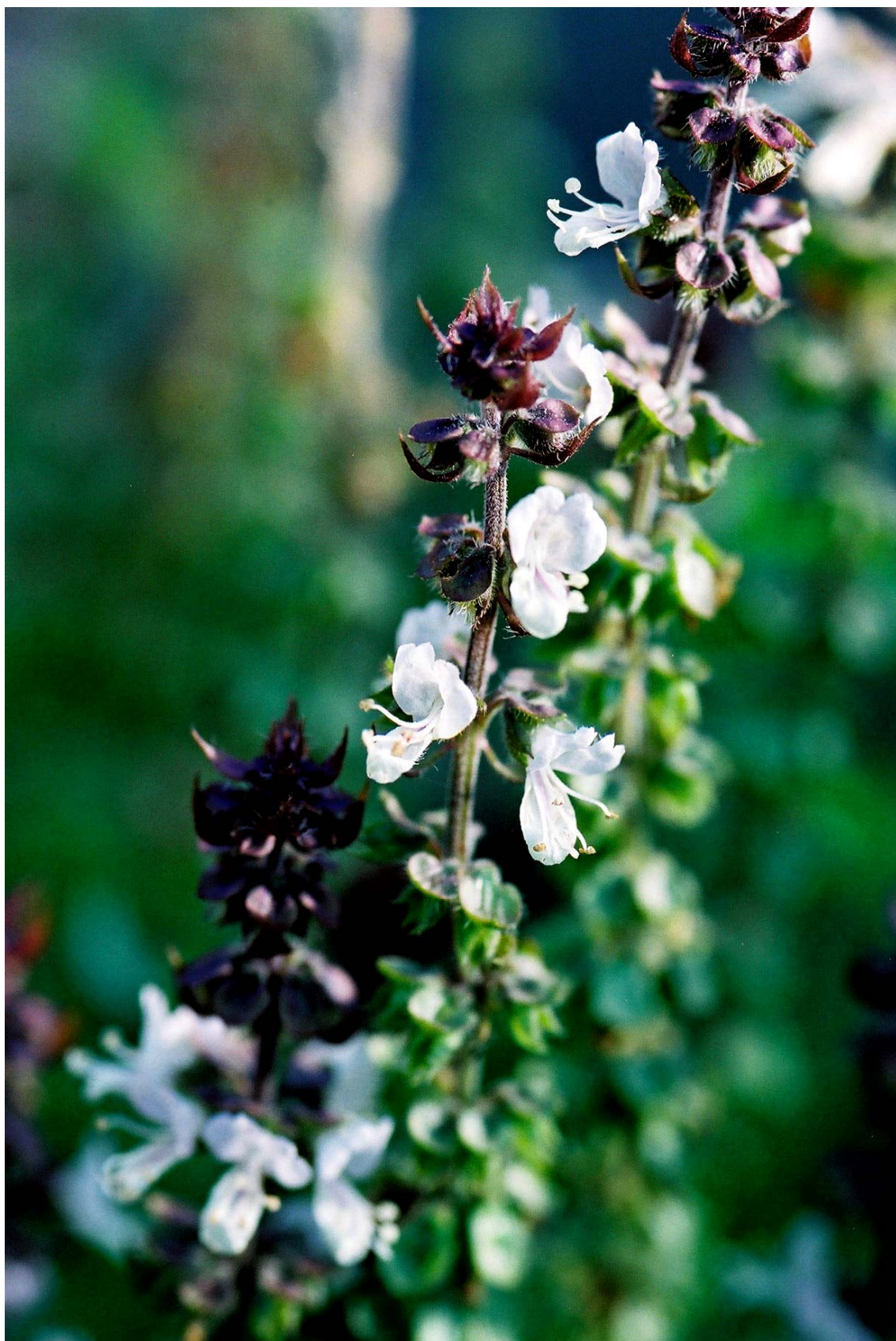
バジルはスパゲッティのバジリコ材料としてのみならず、葉から抽出された香油は石鹼の原料とされている。特にトマトとの相性がよくイタリア料理には欠かせないことのできない香辛料になっており、種子には『グルコマンナン』を多く含んでいる。



スイートバジルの花、スパゲティなどの料理には、かかせない香辛料である(さいたま市緑区)。



スイートバジルの花にやってきたアオスジアゲハ(さいたま市緑区)。



バジルの花（東京都小平市薬用植物園）。

[目次に戻る](#)